

『玉藻前物語』考

— 中国文学との関わりを中心に —

呉 章 娣

はじめに—『玉藻前物語』の内容—

『玉藻前物語』は、玉藻前という美女に化ける妖狐を語る室町物語である。初めに荒筋を簡単に確認しておく。

鳥羽院の寵愛を一身に集める玉藻前という美女がいた。しかし、鳥羽院の健康に異常が生じる。陰陽師の泰成は、「玉藻前の正体は二尾の狐で、仁王経における天竺班足王が祀った塚の神であり、震旦においては、周の幽王の後となって王の命を滅ぼした。その狐は今日本に來ている。それが玉藻前である」と見抜いた。院は泰成の話を信用しなかったが、泰山府君の祭りを行う時に玉藻前は姿を消し、鳥羽院の病氣の原因であることが分かった。玉藻前の正体であった二尾狐は三浦介と上総介に射殺され、死骸は宇治の宝蔵に納められる。狐の腹から仏舍利

が出たので、これを鳥羽院に進上した。額には昼夜照らす白い玉があり、この玉は三浦介の所有となった。尾先には赤白二本の針があった。このうち赤針は上総介がもらい、白針は頼朝に渡された。頼朝はこの針を持つことによって、謀叛を起こし、平家を倒した。

一、『玉藻前物語』の先行研究

『玉藻前物語』の名が見える最も早い例は、川島朋子氏が指摘するように『看聞日記』永享五（一四三三）年五月七日条の『玉藻物語』の記録である¹⁾。現存本の書写年代では、文明二年（一四七〇）に写した赤木文庫旧蔵写本が最古の伝写本である。よって、『玉藻前物語』は一五世紀半ばには既に流布していたと大島由紀夫氏は指摘している²⁾。

『玉藻前物語』現存本以前の伝承について、藤沢衛彦氏は、玉藻前伝承に言及した古典の中で、一四世紀末に形成が始まり、一五世紀前半に完成した『神明鏡』^③が最も古いと指摘する。^④美濃部重克氏は、佐原義連の狐神信仰と関係する「原玉藻前物語」先行を想定する。^⑤中村禎里氏は、『神明鏡』の作者が、既存の説話を省略・短縮した結果であり、『神明鏡』以後に修飾や追加がなされたこともあるにちがいないとする。^⑥『看聞日記』永享五（一四三三）年五月七日条の『玉藻物語』と現存する『玉藻前物語』との間に、内容の上でどの程度の距離があるのかは不明だが、一五世紀前半に完成した『神明鏡』の記述には、現存する『玉藻前物語』の諸要素がほぼ見られることから、一五世紀前半には、『玉藻前物語』の大体の形が成立していたと考えられる。

また、諸本については、松本隆信氏が、七系統として分類した。^⑦川島朋子氏はさらに新しいテキストを補充して、二九の伝本をA～Hの九種類に再整理した。^⑧さらに、伊藤慎吾氏は、川島朋子氏の指摘される現存諸本以外に、真字本『玉藻の草紙』の存在を指摘する。^⑨本稿では、基本的に、従来の研究で最古態本とされている根津美術館本によりつつ、必要に応じて他の諸本も参照する。

次にその内容分析に関して、美濃部重克氏は、狐神が「王法の側に立つ」と「王法に敵する」の二面性を持つものと捉えられているとし、台密系の狐観が反映している可能性が大きいと

指摘する。そして、玉藻前の王法の危機とその護持の主題が元の乱から頼朝挙兵に至る乱世の時代を歴史の上で指向しており、かつ源氏の力による王法（秩序）の回復を是とし、それを祝福する思想性がそこに内蔵されていると述べる。また、同氏は、玉藻前のダキ二天的性格をも指摘する。^⑩中村禎里氏は、『玉藻前物語』は中国から伝来し日本中央部でもかなり流行した妖狐伝承と、中世日本において始まった辰狐信仰、東国武士が霊力ある狐を退治した功名譚、およびそれに違和感を持つ在地の狐信仰の伝承が複合して形成されたとする。^⑪高島一美氏は、『玉藻前物語』諸本を比べて、「王法の威徳」「頼朝開幕」の物語結末（殺生石話抜き）の違いは、『玉藻前物語』テキストの作品主題の違いであると指摘する。^⑫浜中修氏は、玉藻前の正体はダキ二天であるとしつつ、淫心を鎮めて仏道を成就する如意輪観音の性格と、豊穰神・福德神という稲荷神の性格が見えるとし、また、頼朝がダキ二天の遺宝を入手することで権力を手にしたとする本作品は、ダキ二天の遺宝を権力の内部に抱えることで、王権・武権双方にとつて、多分に毒を含んだ王権の物語となったとも述べる。^⑬

このように、従来の研究では、玉藻前の仏教的性格および王権との関わりを分析することがほとんどであるが、『玉藻前物語』における中国文学的要素に関する先行研究はないわけではない。それは玉藻前と妲己・褒姒の妖狐イメージである。玉藻前の説話が『武王伐紂書』、或いは古注千字文の影響を受け、

九尾の狐の妲己が、日本で玉藻前になったとする説が、美濃部重克氏などによって提唱されている。同時に、美濃部氏は「玉藻前」が中国での前生として褒姒を掲げるのも、あるいは「平家物語」の褒姒説話の知名度を利用しているのかもしれないとも指摘する¹⁴⁾。

妖狐の玉藻前が王の命を奪おうとし、国を滅ぼそうとする部分は「平家物語」に見られない。筆者も、この展開は中唐以後の妲己妖狐譚、特に元時代以後の中国講史小説に詳しく描かれているような、君主を魅惑し、国家を顛覆する妖狐妲己との関わりを無視できないと考える。

だが、褒姒・妲己妖狐説に関するもの以外に、中国文学の影響を論じてきた研究は少ない。物語の全体について、美濃部重克氏は、「男主人公が変化のものに精気を奪われてゆく」というところが怪婚譚に、狐女房が退治されるところが怪物退治譚に、といったぐあいに、志怪小説的な物語に変貌してしまっている」と指摘し、また、中村禎里氏は、京を舞台とする部分のストーリーが中国の褒姒説話などの妖狐譚の影響を受けていると指摘するが、それ以上言及していない。これだけでは、やはり不十分であろう。本稿では、それを補うために、最後に狐の死骸から出た三種の宝物、特に、白い玉の正体を詳しく検討し、中国文学の『玉藻前物語』への影響を考えたい。だが、その前に、「陪臣」という言葉について考えてみたい。

二、陪臣と狐媚

『玉藻前物語』では、安倍泰成が玉藻前の正体を報告する時、班足王と塚神の話の続きに、「世々生々を経とも、野干の身をうけて、仏法繁昌の国々に化現して、或は后女采女的身となり、侍女倂臣の類と成て、龍顔に近付奉りて、仏法を滅さんと誓けり」(根津美術館本より¹⁵⁾)。なお、「陪臣」は赤木文庫本・国会図書館本などに「ばいしん」、常在院本「ていしん」などという玉藻前の前生を述べる文がある。この部分は褒姒に言及する文の直前にある。

狐が美女に化けること、或いは美女を狐に例えることは『玉藻前物語』以前の日中の古典には珍しくない。狐が男性に化けるのも中国の狐の説話には普通に見られる。日本古典では、男性に化ける狐の例は少ないが、全くなひとは言えない。しかし、陪臣、あるいは君主の近くにいる政治を操る重臣を狐に擬えてとらえることは、日本古典では非常に見つけない。一方、中国古典には、狐と陪臣との関わりのある話はいくつも見出せる。『晋書』卷一〇五載記第五「石勒」下では、後趙の皇帝である石勒の言葉が載せられている。この中に、「大丈夫行事當礪礪落落、如日月皎然、終不能如曹孟德・司馬仲達父子、欺他孤兒寡婦、狐媚以取天下也¹⁶⁾」という文言がある。男が事を処理する時には、日月のように光って明るいさまで磊落であるべき、曹孟德・司馬仲達父子のように、幼い天子と弱い女性を軽視し、

狐媚で天下を奪つてはいけないというように、主君を裏切つた曹操と司馬懿を狐媚と同様に見る。『旧唐書』卷五三列伝第三「李密」には、祖君彦が隋王朝を討伐するため、李密の代わりに書いた『為李密檄洛州文』が見られる。彼は「隋氏往因周末、預奉綴衣、狐媚而圖聖寶、肘腋以取神器^⑧」という言葉で、隋王朝の政權の不当性を述べる。元々の北周皇室の外戚であつた今の隋王朝の楊氏、昔は北周末の衰えという機に乗じて、君主の近くで勤め、狐媚で天子を騙し、聖宝、神器を取るように、北周を一手に握り、天下を奪つた行為を批判して、楊氏を狐媚にたとえる。『統資治通鑑長編』卷八九真宗元禧元年是、北宋の大匠陳彭年に対して、「然彭年素奸諂、時号『九尾野狐』（中略）齊賢曰、此人在朝、必乱国政^⑨」と記すように、当時の人は陳彭年を「九尾狐」と呼び、張齊賢は彭年が必ず国政を乱すと断言したとする。

高津希和子氏は、『狐媚記』の「狐媚」という言葉の受容を研究する論文の中で、「（中国）正史に見える「狐媚」の用例は非常に少ないが、すべて政治的な意味合いを帯びた批判的な用語であつた」と指摘する。中塚亮氏は「九尾狐」または「妖狐」から「九尾狐」が為すような「蠱惑」に、そしてその「蠱惑」を為す「人間」を指す呼称へと広がつたとする。これらの指摘を踏まれば、正史に記載される「狐媚」は本物の妖怪の狐ではなく、狐のように君王を蠱惑するという意味であろう。要するに、中国古典では、妲己・褒姒のような女性ばかりではなく、

王に近づき、政治を操り、国家を奪う重臣、『玉藻前物語』の言葉で言う「陪臣」を狐と関連づけ、狐に擬えてとらえたのである。『玉藻前物語』に見られる、王に近づいて殺害し、王位を奪う企てを持つ后妃、采女、伎女および陪臣である妖狐は、国家政治を乱す人が狐媚と言われる中国的な觀念を原型とするものだと言えよう。以上、「陪臣」という語彙から、作者の漢文への造詣の深さを見てとれる。

三、妖狐の白い玉の先例

『玉藻前物語』の末尾で、狐の額から出た白い玉は三浦介の所有となつた。この玉に関する従来の研究を確認する。この玉について、美濃部重克氏は玉藻前の呪宝とし、中村禎里氏は、「正体不明としても、これが如意宝珠に類似のものであることは、容易に理解できる。さらに、如意宝珠は、仏舍利と同一視される傾向があつた。だとすれば、三浦介は、仏舍利類の宝物を入手したことになる」と見た。^⑩浜中修氏はダキニ天の宝珠と考へる。^⑪内藤榮氏は、如意宝珠と仏舍利との習合は早くも平安時代から始まつたとする。^⑫そして、中世において、如意宝珠と王権との密接な関係も複数の研究者たちに指摘されている。^⑬しかし、もし、この白い玉を如意宝珠、あるいは仏舍利と同一視するならば、この玉を頼朝ではなく、ただの東国武士である三浦介に渡すのは理解しにくい。そこで、この白い玉は如意宝珠や仏舍利という仏教的な解釈以外の可能性はないのかを考えて

みたい。

狐の玉に関して、一五世紀以前の日本の先例を調べると、『今昔物語集』巻二七「狐託人被取玉乞返報恩語第四十」^②に狐の玉の話が見られる。昔、もののけに憑かれて、病気になる人がいた。そのもののけが物托の女に移り、「自分は狐であり、祟りを起こすつもりはない。ただ散らした食べ物を食べるために、ここに来たのだ」と告白して、懷から「白き玉ノ小柑子ナドノ程ナル」を出してもてあそんでいた。そばにいた若い侍がその玉を奪うと、狐は、「この玉は人間にとつては役に立たないものだが、自分にとつては大変重要なものである。もし返してくれないければあなたに報復するが、返してくれば一生あなたを守る」と、泣きながら頼んだ。そこで、男は玉を狐に返した。狐は約束どおりに男を危難から助けた。

この説話における狐の白い玉が一体どういうものかは明記されていないが、増尾伸一郎氏は、この説話が、中国北宋の『太平広記』「劉衆愛」に類話を見出せると指摘する。^③また陳明姿氏は、この話が「劉衆愛」の他に、やはり『太平広記』に見える「陳斐」という話からもヒントを得ているかもしれないと推測する。^④「陳斐」は約束を守った狐の報恩譚であるが、玉の話とは関わらないので、ここでは省略する。

右に言及される『太平広記』の「劉衆愛」^⑤は、今知られている限りでは、中国古典における狐の玉の最も早い例であり、出典は唐代の『広異記』である。同話は『太平広記』の他に、明

の『狐媚叢談』などにも収録されている。

「劉衆愛」では、婦人に化ける狐が劉衆愛に打たれた後、正体が露顯した。老僧に知恵を授けてもらい、劉衆愛は狐の白い玉、つまり媚珠を手に入れた。そして、彼はこの媚珠を母に渡し、媚珠を持つ母は一生夫に愛された。狐の玉は「媚珠」と呼ばれ、人間は媚珠を手に入れると天下の人に愛されるという。この玉はどうやって出来たのか、文中でも明記されていない。

『玉藻前物語』における妖狐玉藻前の白い玉が、『今昔物語集』の狐の玉や『太平広記』「劉衆愛」の狐の玉と関連性があるかどうかは、この二つの話だけでは分からないが、『神明鏡』における玉藻前伝承、および『玉藻前物語』成立以前、狐が玉を持つている話の先例が既に存在することが分かった。

四、中国における狐の玉

少し後の時代まで視野を広げれば、中国の明時代から、狐の玉の例は多く見られる。まず、明の『西樵野紀』に「狐丹」という話がある。^⑥

齊門外陸墓、吳塔之間、有某居郊垌、地頗幽僻。一薄暮自外歸、暝色慘淡、少憩道傍、倏已昏黑夜至。遙見一燈螢然、由南而來、諦視之、乃一女子口啣一燈、雖不詳、辨其姿色、然覺殊有妖態。稍相接語、便已迷眩。女即解衣野合。事訖、女復迤邐而去。某惴惴強婦。翌晚更思之、竟往其地、女亦果來。如是者數晚。一日、某誇示於某、某曰「子惑矣、人

口豈眞火地耶。子今第執其燈如得之、便強下咽可也」。某始悟。是夕仍去、則女又先至矣。乃與綢繆、初凡合時、女必吐燈眞於地、事訖乃復入口。至是、某何燈眞地、急取咽之。女遽擾壞大慟。曰其奈何、某問之。女曰「吾明語子、吾潛幾百年而丹以成、所欠者陽人精耳、今幸獲濟於君、則躋仙地可立得矣、吾火郎丹也、今君咽之、是吾緣未就而獲既甚矣、吾與君既爾爾、不得為無情、所望君者後事耳」。言畢、涕淚漣然、竟死。某命火燭之、乃一老牝狐也、隨以衣棺瘞之。某獨得高寿令終。

ある男が黄昏時に、辺鄙な郊外で口に灯をくわえている女に出会って、野合した。翌日、男はまた同じ場所であつた。そのまゝ数日後、男は友人にその女の話をもてなした。友人は、普通の人間なら、口に灯をくわえるわけがないので、今度その女と出会つたら、その灯を奪つて呑みなさいと男に言った。友人の話に従つて、男は次に会つた時に、女が地に置いてある灯を奪つて呑んだ。女は大変驚いて、「その灯は私の何百年の修練を経て結成した丹だ。足りないものは陽人の精気だけなので、貴方の精気を吸い取れば、仙界に入れるところだった。今、私の火郎丹は貴方に呑まれてしまった。これは、私の機縁がまだ十分ではなかつたのに、自分の限界以上のものを得てしまつたためなのだろう。私とあなたは既にこのような関係になつているので、どうか情ないことをしないで、私の死後の始末をしてください」と男に言うと言くなり、死骸は雌狐になつた。一

方、狐丹を呑んだ男は結局、長寿になつた。類話はまた、『祝子志怪録』（成立時期不明だが、万暦四〇（一六一二）年の刻本が存在する）、『狐媚叢談』（万暦二二（一五九四）年）万暦三五（一六〇七）年の間に成立）などにも見られる。

『漢語大字典』によれば、「丹」は道家の作る不老長生の丹薬である。ここの狐丹は狐の百年の修練によつて生じたものである。明時代に書かれた狐と丹の話はこれだけではない。

明時代に書かれた狐と丹の話はこれだけではない。明の謝肇淪（一五六七～一六二四）の書いた随筆集『五雜俎』巻九・物部一「狐」には、「狐千歲始與天通、不為魅矣。其魅人者、多取人精氣以成内丹」という言葉がある。ここでは狐の玉が「内丹」と呼ばれる。「内丹」とは、道家でいう不老不死の薬の一種、呼吸をととのえるなどの方法を用いて、自己内部に精気を蓄積し、それが仙薬の形に凝集したものをいう。これに対して、植物、鉱物などを調和し、煉りあげて作つた仙薬を外丹という。狐も年を経たものは道術の心得を持ち、内丹や外丹を作つて仙界に入ることができると信じられていた。李劍国氏は『狐媚叢談』の「狐丹」を論じる時に、内丹が体の内部で形成される形のないものであり、形のある外丹と違い、狐丹が内丹と呼ばれるが、実は外丹の性質も持つていて、これが明の人が道教の内丹理論によつて狐の為に作られた特殊な丹であると指摘する。精気を蓄積し、内丹を作るとする考えは明時代に初めて出現したものではない。十三世紀後半に成立した『朱子語類』『莊子書』

に引用される後漢の『周易參同契』に、「以神運精氣結而為丹」とあるように、精氣と丹の関わりを述べる文が見出せる。⁽³⁸⁾王貞氏は「宋代に内丹を錬成するという考え方が流行してから、明代に内丹を錬成する方法としての性愛技法が、他の動物と比べて淫蕩のイメージを有する狐と結びつきやすかった」と指摘する。⁽³⁹⁾狐丹のような狐の玉に関する話は、それ以外にも、明代の『広艶異編』、清代の『聊齋志異』『閻微草堂筆記』『小豆棚』『醉茶志怪』『子不語』『秋燈叢話』『狐狸縁全伝』など多くの小説集に見られ、いずれも内丹である。

人の精氣を吸い取って内丹を作る妖狐譚は現存資料の中では明時代から多く見られ、精氣を蓄積し、内丹とする考えは『玉藻前物語』以前にすでに存在することがわかる。

五、狐の玉と長寿

これらの話の中で、『玉藻前物語』と最も似ているのは『西樵野紀』の「狐丹」だと思われる。『西樵野紀』「狐丹」では、狐丹が男に吞まれた後、女狐は次のように言う。

吾潛幾百年而丹以成、所欠者陽人精耳、今幸獲濟於君、則躋仙地可立得矣、吾火郎丹也、今君咽之、是吾緣未就而獲既甚矣。

一方、『玉藻前物語』で、三浦介に射殺される前夜、三浦介の夢に玉藻前が出現し、助命を懇願するセリフは次のようである。

我願^{われねがひ}すてに満^{みち}ぬ、衆望^{しゆぼう}またたれかと思つる処、なんち、我命^{うしな}を失はんとす、然へくは、われをたすけ給へ、今度、我を助給は、子々孫々まで、護^{まも}へしといふと思ひて…（以下略）
（根津美術館本より）

本稿で底本としている根津美術館本の本文では、傍線部が理解しにくい。しかし、この部分は赤木文庫本には次のようになっている。

われかねかい、すてにみち、しゆくまうたんぬと、おもひつるところに、なんちにいのちを、うしなわれんとす⁽⁴⁰⁾

（赤木文庫本より）

玉藻前は、「我が願いが既に満ち、宿望を遂げたかと思つた」と言っているのである。

『西樵野紀』では、狐は百年の修煉によって、火郎丹を結成する。火郎丹を持つ狐はもうすこし人間の精を得ると、仙界に入れ、仙狐になれるという。『玉藻前物語』の場合、玉藻前が鳥羽院の精氣を吸い取ることによって、願望が遂げられるはずであった。この願望を『西樵野紀』の言い方で説明すると、仙界に入ることであろう。ただし、仙界に入るのは道教の修仙思想である。『玉藻前物語』には道教の修仙思想より、仏教思想のほうが目立つことを考慮すると、玉藻前の願いは仙界に入ることではなく、仏教的な大成成就かもしれない。その願いを遂げる表現が、玉藻前の腹に仏舎利の出来たことであるとも考えられる。そして、『西樵野紀』における狐丹と、『玉藻前物語』の

白い玉とは同じもの、つまり狐の何百年の修練の成果、人の精気を貯める容器という可能性があるのではないか。

また、『西樵野紀』において、狐丹を呑んだ男は長生きをした。

『玉藻前物語』では、妖狐の白い玉を手に入れたのは三浦介である。この三浦介について、美濃部重克氏は三浦義明に比定する。三浦義明は、『吾妻鏡』治承四年八月二十七日条に「三浦介義明（年八十九）。為河越太郎重頼。江戸太郎重長等被討取。齡八旬餘」とあり、続群書類従本『三浦系図』と『千葉大系図』（房総叢書）でも八十九歳とある。幸若舞曲『高館』では「命の長くわたらせ給はんは、三浦の大介が百六になりしにあやからせ給へ」、馬揃^(註)では「かの三浦の大介義明は、年積つて百六に成しが」というように、百六歳説があり、長寿のためしとされる。『平家物語』諸本でも、三浦介は長寿の人と描かれている。狐の玉を手にいれ、長寿になる点について、『西樵野紀』「狐丹」の男と『玉藻前物語』の三浦介は合致する。

六、『西樵野紀』所収話の成立時期

『西樵野紀』の成立時期は『玉藻前物語』より遅いが、『西樵野紀』に収録される話が『西樵野紀』の成立時期より早くから存在したことは作者の自序から読み取れる。

幽怪之事固孔子所不悟、然而使人可驚可異可懲可勸、粗顯箴規而有補風教者、此傳恰君子不可不知也。余少嘗從侍枝山南濠二先生門下、其清談恠語聽之靡靡忘倦。余故幾得於

見聞者輒隨筆識之。自國朝迄今一百七十七事、名曰野記、噫余性孱劣而獨好為是、亦不自知其癖也。嘉靖庚子春二月既望吳郡西樵山人侯旬敘。

『西樵野紀』の作者である侯旬の自序によれば、この作品は嘉靖庚子（一五四〇）年に成立したとされる。しかし、自序によると、『西樵野紀』の中の話は侯旬自身が創作したものではなく、「自國朝迄今一百七十七事」とあるように、明の建国から侯旬の時代までの話である。つまり、明が建国された一三六八年から『西樵野紀』の成立した一五四〇年まで、その間に「狐丹」または類似的な伝承はすでに存在したことが推測できる。だとすれば、その伝承は一四世紀の後半に日本に伝来され、『玉藻前物語』の作者に利用される可能性がないわけではない。ただし、『西樵野紀』「狐丹」では、丹は珠のような丸い形ではなく、灯という形であり、この点は『玉藻前物語』と異なる。しかし、「狐丹」の類話が清の『耳食錄』卷三に「胡夫人墓」というタイトルで収録されている。

（前略）女子曰「此珠已歷五百年。死於此珠苕、凡九十九人、皆聰明、富貴、寿考主人、其精氣尽在於是。若經百人、則成正果、不謂乃敗於君也。邪道求仙、終歸無益、安敢怨君。君後日福祚且不可量、幸念枕席之情、明日求吾屍於東山下、棺槨而葬之、得比於君之姬妾、歲時以杯酒澆塚上、不使遊魂落魄寂寞泉台、君主惠也、死亦無憾」。遂相持慟哭而去。同室之人莫不聞之、惟之見形耳。次日至東山之下、見一大

狐死焉。生伏而哭之、甚哀。殯葬如礼、為文而祭之。夜乃夢女子来謝。生自吞珠之後、精神智慧尽倍於前。居顯秩、登上寿、皆珠所益雲。乃題狐墓曰「胡夫人之墓」。

「胡夫人墓」の場合、狐は五百年の間、この玉を持っていて、すでに九十九人の男の精氣をこの玉に蓄えている。またもう一人の精氣を吸い取ると、仙界に入れる。この話では、灯ではなく、『玉藻前物語』と同じように丸い形の玉である。明代以前に狐が玉を持っている話がすでにあることを踏まえれば、「胡夫人墓」のような狐が明珠を持っている話が明時代にすでに存在すると考えても無理ではないだろう。

文献上の確実な資料はまだ見つけられていないが、『西樵野紀』『狐丹』に類する伝承は、『西樵野紀』の成立以前に、すでに存在したことが想像できる。狐が人の精氣を吸い取って玉とするという理解が、より古くから、少なくとも明代前期にあったとすれば、それは玉藻前の白い玉のようになった可能性があるのでないか。

七、妖怪と精氣の吸い取り

『西樵野紀』『狐丹』では、狐が人間の精氣を吸い取ることが明確に書かれている。しかも『五雜俎』にも、狐が人の精氣を吸い取って、内丹を作る説がある。明代には、狐が人の精氣を吸い取って、丹を作るといふ觀念が人々に受け入れられている。『狐丹』や『玉藻前物語』が成立する以前に、中国古典に、狐

ではないが、妖怪が人の精氣を吸い取る話がいくつか見られることは確かである。まずは「木師古」を挙げる。⁽⁴⁶⁾

(前略) 按『神異秘經法』云、百歲蝙蝠、於人口上、服人精氣、以求長生。至三百歲、能化形為人、飛遊諸天。捩斯未及三百歲耳、神力猶劣、是為師古所制。師古因之亦知有服練術、遂入赤城山、不知所終。宿在古舍下者、亦足防矣。

これは『太平広記』が『博異志』から収録した話である。木師古という人物が、ある荒れ果てた部屋に泊まろうとした。心配した僧人が木師古に、三十三年の間にこの部屋に泊まった人の中の三十人ほどが傷つけられたので、この部屋はもう使われなくなつたと言ったが、木師古は度胸を見せるため、この部屋に泊まろうとした。夜中に、何か異常が感じられたので、木師古は刀を振った。夜が明けたら、ベッドの隣の地面に、刀に刺された二枚の蝙蝠の屍体が見つかった。この話の後半では、『神異秘經法』の文を引用して、百歳の蝙蝠が人の口から精氣を吸い取ることによって、長生きを求め、そして、三百歳になると人に化けられると解釈する。この話では、蝙蝠が人間の精氣を吸い取ること、及び長生きを求める目的が明記される。

また、『太平広記』卷三三四に収録する「朱敖」(出『広異記』)という話がある。朱敖という人は古廟の近くに一人の緑衣の少女に出会って、少女に話しかけたが、少女は笑うだけで、返事をしなかった。古廟に着くと、朱敖は古廟の壁面に先の少女を見た。夜に、その壁面にある少女は朱敖の夢の中に現れ、一緒

に夜を過ごした。その以後、毎日の夜に、少女は朱敖の夢に現れるので、朱敖はだんだん精氣を失っている気がした。

この話には、壁画にある女が人間の男と交わって、精氣を吸い取ることが見られる。ここでは、壁画にある少女がなぜ朱敖の精氣を吸い取るのか、明記されていないが、精氣が吸い取られたことが確かである。

明代以前、狐ではないが、妖怪が人の精氣を吸う話があることが確認できたが、狐が人の精を吸い取ると明確に描かれる話は、現時点では見つかっていない。しかしながら、人間が狐によつて死ぬ話はある。例えば、元の『湖海新聞夷堅統志』の「狐恋亡人」である。

貧乏な陳承務はある村娘を見染めた。ある日に、その村娘は突然やつてきて、陳承務への愛を告白した。しかし、村娘と付き合った陳承務はどんどん顔色が悪くなりやせて死んでしまった。葬式をした時、村人は老狐が傍で悲しく鳴いているのを見た。火葬にする時、老狐は火の中に飛びこんだ。

この話では、男の死が狐と交わったゆえである。このような話は他にも『太平広記』巻四五八「李黄」(出『博異記』⁽⁴⁸⁾)などがある。男が化けた蛇と交わったところ、体が衰弱し、数日後に死んだ。「狐恋亡人」と「李黄」では、明確に男の精氣が吸い取られるとは書いていないが、男が妖怪と交わって、衰弱して、ひいては死ぬことは、「朱敖」や「狐丹」とはほとんど同じであるので、李項生と李黄も精氣が吸い取られると読めるの

ではないか。ただし、明時代以前の妖怪が人の精氣を吸い取る理由は、「木師古」以外には明記されていない。しかも、「狐恋亡人」の場合でも、狐が主観的に男を殺そうとするわけでもなく、自分が意識せずに男の精氣を吸い取ったわけである。

いずれにせよ、遅くとも唐時代には妖怪が人の精氣を吸い取るという考え方はすでに存在する。蝙蝠や、壁画にある女などの妖怪が人の精氣を吸い取るならば、妖怪としての狐が人間の精氣を吸い取ることもおかしくはない。『玉藻前物語』の場合、玉藻前は八百歳の狐と言われる。東晋葛洪の「抱朴子」「内編」卷三・対俗には「狐狸豺狼、皆寿八百歳。滿五百載、則善變為人形。」という言葉がある。⁽⁵⁰⁾前に触れた「木師古」という話では、百歳の蝙蝠が長生きを求めするため、人の精氣を吸い取らなければならぬという。『玉藻前物語』では、玉藻前は八百歳の狐であり、つまりいよいよ寿命の尽きる時期になった。だとすれば、玉藻前は長生きを求めするため、鳥羽院などの人間の精氣を吸い取ることが必要となった。蝙蝠などが人の精氣を吸って長生きする話があるわけだが、狐の玉は前に述べたように長生きと関連づけられるのだから、精氣を蓄積した狐の玉が長生きの仙薬に成ることも当然であろう。そして、男、つまり鳥羽院とまじわって精氣を吸い取ることは「朱敖」、「狐恋亡人」なども似ている。

まとめ

玉藻前の褒姒との関わり、陪臣と妖狐との関わり、その他様々な所から、物語作者の中国文学的教養が見られる。玉藻前の持つ白い玉に関しても、中国文学との関わりの可能性を見てきた。玉藻前という妖狐の白い玉の性格は、仏舍利と同一視される如意宝珠よりも、長寿に繋がる中国文言小説における陰気と陽気の結合によって形成される狐の玉に似ていると考える。白い玉が頼朝ではなく、三浦介の手に渡ったのは、三浦介が長寿として有名な人だったからではないか。そう考えれば、玉藻前の白い玉を三浦介の手に入れるという設定が解釈できるのではないか。

「劉衆愛」における狐の玉、いわゆる媚珠によって、唐宋時期には、狐が玉を持つという考え方が既に存在したこと、『今昔物語集』の狐の玉の説話によって、日本に伝わったことが証明できる。唐代には、妖怪が人の精気を吸い取る伝承も存在し、明代になると、狐が人の精を吸い取る説も確認できる。そうした伝承と、狐の玉という要素、さらに道教の精気を利用して内丹を作る要素が加わって、「狐丹」のような話が出現した。つまり、明代前半に、「狐丹」のような話は既に成立し、一四世紀後半か一五世紀初期に日本に伝来され、『玉藻前物語』の作者に利用された可能性があると考ええる。

注

- (1) 川島朋子「室町物語『玉藻前』の展開 能(殺生石)との関係を中心に」(『国語国文』第七三巻八号、二〇〇四年八月)
- (2) 大島由紀夫「玉藻前」諸本をめぐって(二)——陽明文庫本を中心として——(『伝承文学研究』四一号、一九九三年三月)。後、『中世衆庶の文芸文化』(三弥井書店、二〇一四年)再録。
- (3) 近藤瓶城『改定史籍集覧・二冊通記類』(近藤出版部、一九〇〇年)
- (4) 藤沢衛彦『日本伝説研究』巻五(三笠書房、一九三五年)
- (5) 美濃部重克「玉藻前」考(渡辺昭五・福田晃編『伝承文学の視界』三弥井書店、一九八四年)。後、『中世伝承文学の諸相』(和泉書院、一九八八年)再録。
- (6) 中村禎里『狐の日本史 古代・中世篇』(日本エディタースクール出版社、二〇〇一年)
- (7) 松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(『御伽草子の世界』奈良絵本国際研究会議編、三省堂、一九八二年)
- (8) 川島朋子前掲注1論文。
- (9) 伊藤慎吾「中世物語資料と近世社会」(三弥井書店、二〇一七年)
- (10) 美濃部重克前掲注5論文。
- (11) 中村禎里前掲注6論文。
- (12) 高島一美「玉藻前物語」諸本研究 物語の展開と主題(『宮城学院女子大学大学院人文学会誌』第六号、二〇〇五年三月)
- (13) 浜中修「玉藻前物語考」(徳田和夫編『お伽草子 百花繚乱』笠

間書房、二〇〇八年)

(14) 美濃部重克前掲注5論文。

(15) 松本隆信編『室町時代物語大成』補遺二(角川書店、一九八八年)

(16) 『晋書』(中華書局、一九八二年)

(17) 『旧唐書』(中華書局、一九八六年)

(18) 『統資治通鑑長編』(中華書局、一九九五年)

(19) 高津希和子「狐媚記」試論 大江匡房の「狐媚」受容——『国語文』八二巻四号、二〇一三年四月

(20) 中塚亮「姐己と狐」『封神演義』に見る、イメージ及び物語の成立に至る一過程」『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』三一九九九年三月

(21) 美濃部重克前掲注5論文。

(22) 中村禎里前掲注6論文。

(23) 浜中修前掲注13論文。

(24) 内藤栄「舍利と宝珠」『日本の美術』五三九号、至文堂、二〇一一年四月

(25) 阿部泰郎「宝珠と王権 中世王権と密教儀礼」(岩波講座『東洋思想』巻十六「日本の思想」二、一九八九年) その他、山本ひろ子『変成譜』(春秋社、一九九三年)、田中貴子『外法と愛法の中世』(平凡社、二〇〇六年) などにも同じ指摘が見られる。

(26) 森正人校注『今昔物語集・五』(新日本古典文学大系三七、岩波書店、一九九六年)

(27) 増尾伸一郎「葛の葉」の影 狐の異類婚と子別れ」『国文学解釈と鑑賞』六九巻一二号、二〇〇〇年一二月

(28) 陳明姿「今昔物語集」における狐説話と中国文学」『台大日本語文研究』第一八期、二〇〇九年二月

(29) 『太平広記』巻第四五一、狐五(中華書局、二〇〇六年)

(30) 『統修四庫全書』子部・小説家類(上海古籍出版社、二〇〇二年)

(31) 写本では、この文字の左の部分はギョウニンペンで書かれているが、「獨」の字の意味と解される。

(32) 劉愛麗「狐媚叢談」研究」(雲南大学修士論文、二〇一二)に言及される。

(33) 「狐媚叢談」巻五「狐丹」、国立公文書館デジタルアーカイブ <https://www.digital.archives.go.jp/>

(34) 『漢語大字典』巻一(上海辞書出版社、一九八六年)、原文は「道家煉製的所謂長生不老藥」。日本語訳は筆者による。

(35) 「五雜俎」巻九・物部一(中華書局、一九五九年)

(36) 前野直彬訳『閨微草堂筆記・子不語・述異記・秋燈叢話・諧鐸・耳食録』(平凡社、一九七一年)の注釈による。

(37) 李劍国『中国狐文化』(人民文学出版社、二〇〇二年)

(38) 『朱子語類』巻百二五「莊子書」(中華書局、一九八六年)

(39) 王貝「中国と日本の変身譚の歴史的変遷に関する考察…狐、蛇、虎、犬、亀を中心に」(大阪大学博士論文、二〇一六年三月)

(40) 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成・九』(角川書店、一九八一年)

- (41) 黒板勝美編『吾妻鏡・前編』（新訂増補国史大系三一、国史大系編修会、一九六四年）
- (42) 麻原美子・北原保雄編『舞の本』（新日本古典文学大系五九、岩波書店、一九九四年）
- (43) 麻原美子編前掲注42資料。
- (44) 延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈・第二末（卷五）』二五衣笠城合戦之事 義明再期」注釈（汲古書院、二〇一一年）
- (45) 『耳食録・三異筆談』（重慶出版社、一九九六年）
- (46) 『太平広記』卷第四七四、昆虫二（中華書局、二〇〇六年）
- (47) 『太平広記』卷三三四、鬼十九（中華書局、二〇〇六年）
- (48) 『湖海新聞夷堅統志』後集卷二、精怪門（中華書局、二〇一〇年）
- (49) 『太平広記』卷四五八、蛇三（中華書局、二〇〇六年）
- (50) 『抱朴子内篇校釈』（中華書局、一九八五年）

（こ・しょうてい／本学大学院博士前期課程修了）